

赤色 MAGIC★ ミステリアス・カラー

2026. 1.22 |木| ー 5.24 |日|

ハッとするほど鮮やかで、グッとくるほど魅惑的。スッと魔さえも祓いのけ、ドキッとさせる危険な香。

この世に色は色々あれど、やっぱり要は赤い色。

弁柄べんがら、茜、紅、丹、朱、緋、臙脂えんじなど多彩に表現される「赤」は、

古来より「いのちの色」として私たち日本人の感性に寄り添い続けてきました。

色彩文化が洗練された江戸時代、赤は神社や祭礼など信仰の色にとどまらず、

衣服や化粧に使われる装いの色、病魔を退散させる祈りの色、

そして浮世絵の印象を左右する驚嘆の色でもありました。

本展では、燃え立つ紅葉、邪気を祓う赤い食べ物くまどり、隈取や赤姫など歌舞伎の赤色、

江戸っ子の装いに彩を添えた粋色いろどり、さらには明治の浮世絵を象徴する赤い顔料など、

日本に色濃く息づく赤色の物語を広重の作品とともに紐解きます。

柳は緑、花は紅。ようこそ、赤色が放つ魔法の世界へ



見どころ HIGHLIGHTS

★ 日本のキー・カラー「赤」!

生命力と神聖な力の象徴である「赤」。信仰や食べ物、お洒落に至るまで、日本文化に色濃く根付く赤色ワールドへ誇ります。

★ 小豆と梅干のヒミツ?!

赤い食べ物はマジカル・フード。昔から魔除けやお祝いには欠かせません。知っているようで知らない小豆と梅干の秘密を紹介。

★ めくるめく赤物語

茜、紅、蘇芳、弁柄…、赤はパリエーションが豊富。それゆえ、歴史に転がる逸話もたくさん! 勇ましい赤、お洒落な赤、色々な物語をお届けします。

MAGIC★ あかあかや

輝きの色

「赤」の物語のはじまりに、光あり。

夜明けの太陽に古代の日本人が感じとった色、それが「赤」でした。

夜明けの「あけ」、光が満ちてゆく明るい様子が、赤色の語源。

また「明」は日と月から成るほか、窓から差し込む月明かりの様子から生まれた文字だとか。

暗黒の闇に射す陽光や月光が、全てを明るく照らす喜びの色「あか」のルーツなのです。

曙いろごろもの空色衣かへにけり — 小林一茶
(曙の空は、まるで色の衣に着替えたように変化していくなあ)

神田明神(正式名は神田神社)は、天平2年(730)に武蔵国豊島郡(現千代田区大手町付近)に創建されたが、元和2年(1616)に江戸城の表鬼門(北東)にあたる現在地に遷座した。徳川家康が関ヶ原の戦いに臨む際に戦勝を祈願したことから徳川家の信仰が篤く、江戸の総鎮守として尊崇された。

本図は高台に建つ神田明神から、東側の眺望を描く。神主、巫女、仕丁(儀式や祭の補助をする人)が、日の出で赤らむ江戸市中を眺めている。



名所江戸百景 神田明神曙之景

紅葉と梅

「秋」の語源は、一説に草木が赤らむ季節であるからとか。
 「龍田の川の錦なりけり」と古歌が讃えた真っ赤な秋、
 江戸時代は庶民もこぞって紅葉スポットへ出かけました。
 また、春を告げる「紅梅」も愛でる紅。艶やかな紅梅は
 平安時代から愛され、江戸時代には品種改良が
 盛んに行われて各地に名所が生まれました。
 季節を彩る忘れがたき色、「紅」に染まりませんか。



名所江戸百景
真間の紅葉手古那の社継はし



名所江戸百景 請地秋葉の境内

こもみじ くいか
濃紅葉に涙せき来る如何にせん

(いよいよ紅く色が深まった紅葉を見ていると、涙が込み上げてくる。どうしたらよいだろうか)
 — 高浜虚子

下谷の「正燈寺」や品川「海晏寺」など、江戸には
 紅葉の名所が多くあった。向島(墨田区)の秋葉
 大権現社(現・秋葉神社)も名所のひとつで、近くには
 鯉料理で知られる武蔵屋、大七、葛西太郎といった
 老舗の料理屋が並んでいたことも賑わいを後押しした。

また、江戸近郊では真間山弘法寺(千葉県市川市)も美しい大楓が植わることで知られていた。
 《請地秋葉の境内》は、秋葉大権現社境内の西側にあった池と紅葉を描く。緑の松と紅い楓が
 水面に映り、人々はその美しさに時を忘れていた。茶屋で美景に思わず筆を執る風流人は、
 まるで広重自身のようなのである。

《真間の紅葉手古那の社継はし》は、弘法寺に植わる大楓越しに、遠くの筑波山を望む。
 顔料の丹が酸化してくすんでいるが、摺られた当時は紅葉さながらの鮮やかさだった
 であろう。

信仰の朱

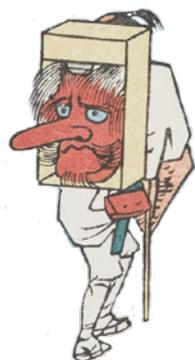
太陽や火、血液を連想させる赤色は、生命力の象徴。穢れを祓うと信じられ、古くから「魔除けの色」とされてきました。「赤」の字は、人が手を広げる形「大」が「火」を使って穢れを祓う形といえます。神社の鳥居や仏閣、祭礼に朱色が多用されるのは、邪気を寄せ付けぬ神秘の力が信じられているから。異界や神聖な力のシンボルカラーといえ、やっぱり赤なのです。

にぬ とりい ごしんいき
丹塗りの鳥居は御神域のシンボル！

熱田神宮の門前町である宮は、東海道屈指の大きな宿場。宮から桑名へは「宮の渡し(七里の渡し)」で海上7里(約28km)の船旅で、4時間ほどかかった。

本図は「浜鳥居」の建つ七里の渡し口を描く。熱田神宮には「八疆の鳥居」と呼ばれる八つの鳥居が神域との境に設けられていた。右端には常夜燈が見え、帆をおろした船や上陸する旅人など、賑わう様子が伝わってくる。

鳥居の朱色が、空と海の青と呼応して美しい。



豎絵東海道

五十三次名所図会 四十二
宮 熱田の駅 七里の渡口



MAGIC★4

邪気祓いで縁起よし

小豆と魚

古くから無病息災を祈る行事や祝いの席に、小豆料理など赤い色の食材が好まれます。江戸時代の学者・貝原益軒によれば、小豆の「あ」は「赤色」に由来するとか。甘い餡が庶民の口にも入るようになった江戸時代、おはぎや柏餅などは節句と結びついたほか、街道名物として旅人の元気の源にもなりました。鯛や海老など赤い魚介も祝い膳の定番。生命の色を食べて、元気いっぱい、身体ポカポカ！邪気がすっかり祓われますように。



鶯吉版東海道

東海道四十三 五十三次之内 四日市 参宮追分道

小豆は邪気祓い、赤パワーで体力回復！

四日市と石薬師の間にある日永には、伊勢街道と東海道との追分(街道の分岐点)があり、多くの旅人で賑わった。街道入口には、伊勢国入りを表す「二の鳥居」が建つ。一の鳥居は桑名と関の追分にそれぞれある。本図は、伊勢街道への入口で、日永名物「まんぢう」の看板が見える二の鳥居周辺の様子を描く。この辺りは茶屋が立ち並び、笹井屋彦兵衛など数軒では、粒餡を餅で包み細長く伸ばした「なが餅」を売っていた。小豆に力を得て旅の疲れも吹き飛んだことだろう。



MAGIC★5

赤子から正義漢まで

赤色人生

赤子で生まれ、赤く燃える恋をして、お酒で顔を赤らめ、還暦に赤いちゃんちゃんこ。人生には赤色がつきものです。疱瘡(天然痘)や麻疹で子どもが命を落とした江戸時代、生命力と魔除けの力にあやかろうと赤い子ども着や玩具が好まれました。歌舞伎でも、「紅隈」を施した正義のヒーローや「赤姫(恋に生きる赤衣着物のお姫様)」など、赤色のイメージをまとう登場人物が豊富。人生色々の赤物語をどうぞ。

顔面の紅隈は、正義感の表れ

鈴鹿川の北岸にあった石薬師宿は、真言宗の名利・石薬師寺(山号は高富山)の門前町。寺の東側には源範頼(頼朝の弟)を祀る御曹司社があり、範頼が平家討伐時に地面にさしたという蒲桜の伝説も知られる。

本図は風景を広重、手前の弁慶を三代豊国が描く。当時、範頼の桜は義経と誤解されており、本作も義経にちなむ弁慶を描いたのだろう。歌舞伎「御所桜堀川夜討」での弁慶は黒の長袴姿で、大毬栗に車鬘と真っ赤な紅隈が勇猛さを感じさせる。



赤色はヒーロー

雙筆東海道
石薬師 高富山遠景

粹色

江戸時代、奢侈禁止令で華美を禁じられた庶民の装いは地味色が主流。しかし、その下から赤い襦袢をチラリとのぞかせてお洒落を楽しみました。当時金と同じくらい高価な「紅」は女性の憧れ。唇をはじめ、頬や目元、爪に施す「紅化粧」は彩りに大切なキメ色でした。装いの赤といえば、男性の禪もそのひとつ。主に奴や侠客が好んだ赤い禪は、魅せ下着の魁です。まさに纏う人を美しくする赤色マジック！



名所江戸百景 鎧の渡し小網町

赤色はどんな女性も美しく

江戸は河川や濠など水路が張り巡る水の都。物資を運ぶ荷舟や客を乗せた渡し舟が、数多く行き交っていた。水辺に集う面々は荷舟や旅人のほか、日が暮れると吉原通いの舟や夜鷹など顔ぶれも変わる。《御厩河岸》は、浅草三好町付近にあった御厩河岸から隅田川の夜景を望む。舟の舳先に立つ2人の女性は、「夜鷹」と呼ばれた最下級の街娼。対岸の本所吉田町周辺には、夜鷹が多く住んでいたという。白塗りの顔に手拭を被り、黒い着物に赤い帯が闇に映えて艶めかしい。《鎧の渡し小網町》は小網町と茅場町を結んだ鎧の渡しを描く。燕が飛ぶ初夏、白い土蔵が並ぶ水辺を様々な舟が往来している。右端の女性は渡し舟を待っているのだろう。赤色の帯や緋縮緬の鬘掛が、女性の魅力を引き立てている。



名所江戸百景 御厩河岸

驚嘆の赤

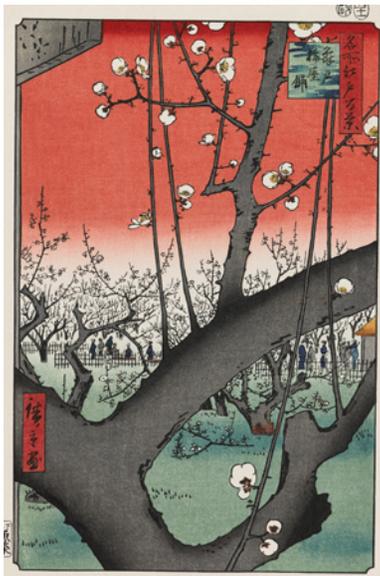
カリスマの色彩。そんな称号がピッタリな「赤」は、どんな色の中にあっても際立ちます。情熱、激しさ、生命力、華やぎ、愛情、緊急性など多彩なイメージの広がりを持ち、「名作にこの赤あり」と印象付ける決め手の色にもなりました。その作品をひと目見た瞬間、輝く陽気や匂い立つ香氣など絵師が放つ「赤」の魔法に、もうすっかり虜です。



にはひは蘭麝を欺き、花は薄紅なり —『江戸名所花暦』
(清香庵の梅の香りは蘭とも麝香ともつかぬ香しさで、花は薄い紅色でこれまた美しい)

亀戸天神の北東の裏手に、「清香庵」と呼ばれた梅園があった。ここは伊勢屋喜右衛門宅の庭園で、数百本の梅が楽しめた。中でも水戸光圀の命名と伝わる「臥龍梅」は、龍が地を這うような枝ぶり得名木と名高かった。

本図は梅を真正面から大胆に捉えて描く。背景を覆う紅色のぼかしが、辺りに漂う芳香や梅の花が織りなす淡い紅色の世界を感じさせる。絵を見る者も梅園を歩き、あたかも枝の間から梅園に集う人々を垣間見ているような気分に誘う。



参考作品(復刻)
名所江戸百景 亀戸梅屋舗

明治の赤

明治時代、「赤」に劇的な変化が訪れます。安くて発色がよい化学染料アニリン(洋紅)が西洋から輸入され、その鮮やかな赤色が高価な紅に代わり浮世絵に多用されました。新しい赤色を用いて様変わりしてゆく街並みを描いた横浜絵や開化絵は「赤絵」と呼ばれ、明治の浮世絵を象徴する色でした。多くの時代を彩った「赤」の物語は、今も脈々と続いています。



舶来の赤が際立つ明治の「赤絵」

明治4年(1871)、紙幣を印刷する部門として大蔵省紙幣司が設立された。紙幣寮、明治10年(1877)に紙幣局など改称・改編を経て、現在の国立印刷局に至る。明治9年(1876)、大手町に完成した紙幣工場「朝陽閣」は常盤橋の西側で、2階建て赤煉瓦造りの正面上部には菊花の紋と鳳凰像が置かれていた。

本図は日本橋川に架かる常盤橋と紙幣局を描く。空の吹き上げぼかしや人力車などに見られる鮮烈な赤色が、明治の新しい風を感じさせる。



三代歌川広重 東京名所之内 常盤橋紙幣局 明治12年(1879)

ターゲットは野鳥だ!

2026. 5.28 |木| ▶ 9.27 |日|

ぼんきゅん

次回予告

憧れたり、信仰したり。はたまた愛でたり、食べてしまったり。古くから、私たちにとって身近な小さな命である「鳥」。天地を優美に舞う姿から「神の使い」と崇め、その囀りに人生の悲喜交々を重ねて表現するなど、美しい日本の文化を育んできました。多様な芸術と娯楽が華ひらいた江戸時代、鳥はブームを巻き起こします。将軍から庶民まで鳥料理に舌鼓を打ったほか、海外から持ち込まれた珍しい鳥に驚嘆し、鳥を飼育して鳴き声の美しさを競い合いました。本展では鶺鴒や鷹狩など鳥と生きる暮らし、お酒落心をくすぐる鳥文様、魅惑的な羽色に由来する色、鳥の瞳だから見える景色など、日本文化を縦横無尽に天翔ける野鳥の軌跡を広重の作品とともに辿ります。

花に戯れ、風に詠う



名所江戸百景《芝うらの風景》

鶺鴒夫婦に千鳥足、雀の涙に鶴のひと声。

雁首揃えて、頂山の鶺鴒。どうぞ皆さま呼び鳥!



貨幣・浮世絵ミュージアム
MONEY & UKIYO-E MUSEUM



公式ホームページ

052-300-8686 担当:鏡味・那須

ご案内

- 開館時間 | 9:00~16:00 (入館は15:30まで)
- 休館日 | 祝日(2/11・23、3/20、4/29、5/3-5)
- 入館料 | 無料 (団体見学の方は事前にご連絡ください)

〒460-8660 名古屋市中区錦3-21-24 三菱UFJ銀行名古屋ビル1階

052-300-8686 <https://www.bk.mufig.jp>

■ 駐車場はございません。公共交通機関をご利用ください。

■ 催しの中止・延期・変更の可能性があります。

※「Instagram (インスタグラム)」はMeta Platforms, Inc.の登録商標です。



Instagram

赤色 と健康

日本では赤色に生命力や魔除けの力があると信じられ、古くから赤い食べ物が祭祀や祝いの席で好まれてきました。日本文化に深く根差した赤色の食材「小豆」と「梅干」を紹介します。

あずき 小豆 東アジア産といわれるマメ科の植物。大豆より小さな豆のため、「小豆」と書き、アズキと読む。

「早く柔らかくなる赤く小さな豆」という意味だぞよ!



江戸の本草学者 貝原益軒『大和本草』より

語源

「ア」は赤色、「ツキ(ズキ)」は溶けることを意味するという。

年中行事と小豆

小豆の赤色は厄を祓うとされ、彼岸、土用、盆などの行事にはおはぎ(ぼた餅)などの餡を伴う餅が食された。

小豆は洗粉

小豆の粉に土瓜根(カラスウリの根)などを配合した「澡豆」が中国から伝わり、古くから洗浄料として使われてきた。

発泡性物質のサポニンが汚れを落とすよ!

小豆は薬

中国最古の本草書『神農本草経』

小豆の煮汁は消炎、利尿、解毒、排膿などに効く。

江戸時代の本草書『本朝食鑑』

「気分を穏やかにし、湿(体の余分な水分)を除き、尿の出をよくして腫物を治すほか、乳の出を良くする。



神農

古代中国の伝説上の帝で 医薬・農業を司る神

漢方

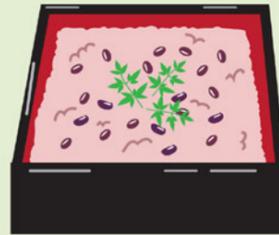
漢方では赤小豆と呼ぶ。

赤小豆鯉魚湯

小豆と鯉を用いた薬膳スープ。浮腫み解消に効く。

リラックス効果!

ビタミンB1が豊富で、脚気予防には、小豆が最適!



赤飯

古代の米は「赤米」で、神への供え物としても用いられた。江戸時代は白米(ジャポニカ米)が主流となり、赤米の代わりに小豆で色付けしたもち米を祝いの席で食べた。

おはぎ / ぼた餅

もち米とうるち米を焚き、軽くつぶして丸め、餡などをつけたもの。地域や季節で名称が異なる。お彼岸に食べる風習は、江戸時代に定着した。



江戸時代 小豆レシピ

あずきがゆ 小豆粥

米と小豆を炊き込んだ小豆粥は、中国の風習に由来するという。日本で庶民にも広まったのは江戸時代。1年の無病息災を祈願して、旧暦正月15日に食べた。色合いから桜粥とも。



江戸後期の風俗誌『守貞謄稿』によれば、京都・大阪では塩味、江戸では甘くして食べたんだって!

まんじゅう 饅頭

饅頭は、鎌倉~室町時代に中国から禅僧が伝えたという。中国の「餡」は肉類の詰め物だが、日本では野菜や小豆を代わりに入れるようになった。甘い小豆餡の饅頭は、砂糖が普及した江戸時代に広く定着し、各地の名産として様々な饅頭が登場した。

具だくさんで美味しそう!



おことじる 御事汁 (六質汁)

里芋やこんにゃくなど6種類の具材を使ったみそ汁。必ず小豆を入れた。旧暦の12月8日と2月8日は「事八日」と呼ばれ、物事を始めたり納めたりする大事な日とされた。江戸時代、五穀豊穡や無病息災を祈って「事八日」に御事汁が作られた。



うめぼし 梅干

梅干が赤くなったのは江戸時代。梅の品種も増え、赤紫蘇で色と香りをつけた赤い梅干が庶民に広まった。

疲れ知らずじゃヨ

梅は三毒を断つー日本最古の医学書『医心方』より

梅は殺菌力や腐敗防止の力があり、三毒を断つ効果がある。

- 三毒
- 食毒(飲食物の滞り:宿便)
- 血毒(血の滞り:血行不良)
- 水毒(水の滞り:浮腫み)

梅干しの七徳ー江戸時代の本草書『飲膳摘要』より

- 1 毒消しになる(うどんには梅干を添える)
- 2 腐敗を防ぐ(飯櫃に入れば腐らない)
- 3 病気を避ける(旅館では朝食に梅干を添える)
- 4 味が変わらない
- 5 息切れしない
- 6 こめかみに貼ると 婦人の頭痛に効く
- 7 梅酢は流行り病に効く

赤をめぐる色と文化

古来より日本では赤色の染料に茜・紅花・蘇芳、顔料には辰砂・弁柄・鉛丹が主に用いられてきました。なかでも高価な「紅」は憧れの色として逸話が豊富。また時代を経るごとに、イメージ豊かな色名が登場しました。

顔料 鉱物由来

非水溶性
土・石・岩

鉛丹

酸化鉛が原料の鮮やかな橙色。木材の腐食を防ぐため、神社の楼閣や鳥居にも塗られた。

弁柄

酸化鉄を含む赤土が材料。色名はインドのベンガル地方で産出したものが良質だったことに由来。古来より使われ、建築物の塗装や陶磁器、漆器などにもみられる。

辰砂(朱)

硫化水銀の鉱石が原料の鮮やかな朱色。有毒。古くは「丹」と呼ばれ、珍重された。魔除けや防腐剤として神社の鳥居にも使われたほか、朱肉にも用いた。



真っ赤な紅隈は正義のヒーロー



赤の色名いろいろ

曙色(東雲色)

明け方の空の色。江戸時代に名付けられた色名で、曙の空のように着物の上部を濃く、裾を淡くぼかす「曙染」も流行した。

緋色(火色)

緋は和名が「あけ」で、太陽や火を表す。茜で染めたやや黄色みを帯びた鮮やかな赤。平安時代には「思ひの色」とも呼ばれ、燃えるような恋心を連想させた。

今様色

今様は「当世流行り」の意味。平安時代の貴族たちに流行した薄い紅色。一説に紅梅の濃い色とも。「源氏物語」で光源氏が紫の上に贈った衣裳の色。

染料 植物・動物由来

水溶性
花・葉・茎・幹・根・虫

蘇芳

くすんだ紫みの赤。蘇芳(熱帯のマメ科の低木)から幹の芯材を煮沸して煎汁を取り、染色に用いる。奈良時代、養老律令の「衣服令」では紫に次ぐ高貴な色とされ、平安時代も貴族に愛された。

臙脂

中国渡来の黒みを帯びた濃い紅色。ラクカイガラムシの分泌液からなる染料を、綿に吸収させて乾燥したものを使用した。

茜

茜草の根で染めた暗い赤色。漢方では茜草根といい、止血や解熱に利用する。「あかねさす」は日の光の様子を表し、紫にかかる枕詞。

赤坂(東京都)の由来は、アかねが栽培されていたからだよ。



紅の文化史

エジプト周辺が原産地の紅花は、中国を経由して日本に伝来。希少な紅は高価で、平安時代は貴人しか着用を許されない禁色の一つだった。江戸時代でも紅は「紅一匁、金一匁」といわれ、金と同じくらいの価値があった。

紅

キク科の紅花の花弁で染めた鮮やかな赤色。「くれない」の語源は呉(中国)から伝わった藍(染料)に由来。



紅花 キク科。アザミに似た形状。夏に黄色、秋には紅色に変化。江戸時代は現在の山形県最上川流域が大産地。



《当世美人合 躍師匠》 歌川国貞 国立国会図書館蔵

江戸時代の工夫

高価な紅は庶民の憧れ。奢侈禁止令下でも江戸っ子は紅に似せた色で代用するなど工夫して、お洒落を楽しんだ。

笹色紅

高価な紅を濃く塗り重ね、下唇を玉虫色に光らせる化粧法が江戸後期に流行した。紅を容易に買えない庶民は、墨を塗った上から紅を重ねる工夫で安価に流行を取り入れた。

甚三紅(中紅)

紅花の代わりに茜や蘇芳を用いた代用紅。承応年間(1652-55)頃、京都長者町の桔梗屋甚三郎が考案。本紅にくらべて安価。



《艶本 婦恋のゆき》 漢斎英泉 メトロポリタン美術館蔵

はで娘 江戸の下から京をみせ お洒落な娘は、江戸紫の着物の下に京紅(甚三紅)の長襦袢をのそかせているよ 『俳風柳多留』

赤色と浮世絵

華やかな赤色は、作品の印象を左右する決め手の色。浮世絵版画発展の歴史において、赤色は様式転換のキー・カラーともいえます。墨一色だった浮世絵は、赤色を得て徐々にカラフルな「錦絵」となりました。また赤色の力を信じて制作された「疱瘡絵」など、浮世絵の赤を紹介します。

浮世絵版画の流れ

墨摺絵

菱川師宣 懐月堂派
鳥居清信 奥村政信

墨一色で摺られた版画。

丹絵

鳥居清信 鳥居清信

「墨摺絵」に主に「丹」を筆で彩色。丹は、鉛に硫黄と硝石を加え、焼いて精製した「鉛丹」という鉱物系の赤い絵具で、初期浮世絵にみられる。



《衝立のかけ》
菱川師宣 延宝(1673-81)後期頃 シカゴ美術館蔵



《二代目 藤村半太夫の大磯の虎》
鳥居清信 正徳5年(1715)頃 シカゴ美術館蔵

黄色みのある
素朴な赤色が魅力的

悪霊退散！

疱瘡絵

疱瘡絵には金太郎や達磨のほか、軽くすむように、軽やかに跳ねるウサギなども描かれたよ



江戸時代は子どもの死亡率が非常に高く、特に恐れられていたのが疱瘡(天然痘)や麻疹だった。「疱瘡の見目定め麻疹の命定め」という諺があるように、疱瘡で痘痕が残ることや麻疹で命を落とさないか心配の種が尽きず、人々が頼ったのは信仰による赤色の力だった。「疱瘡絵」は赤一色で摺られ、鯛や達磨など赤色の玩具のほか、桃太郎や金太郎などが描かれ、護符のように使われた。

子どもが着る腹掛けや着物は、禍や病気から守る願いを込めて主に赤色が用いられた。

子ども着は赤

子どもが着る腹掛けや着物は、禍や病気から守る願いを込めて主に赤色が用いられた。



《忍愛撫子合 南京なでしこ》(部分)
三代歌川豊国 国立国会図書館蔵

早く無事に治りますように！
松元(疱瘡神)を祀って祈ります。

赤色と異界の者

天狗や達磨、狸々など、赤色をイメージカラーとする異界の者は、いずれも不思議な霊力を持つとされた。

達磨大師

失明が怖い疱瘡には、目の大きな赤い達磨が効果的だよ！

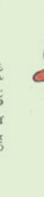


《姿見の達磨》(部分)
鈴木春信 明和4.5年(1767.68) シカゴ美術館蔵

インド出身で、中国の禪宗の始祖。インド名はボーディダルマ(Bodhiharma)。6世紀初め、西域より中国に渡り少林寺で悟りを得たという。「起き上がり小法師」は達磨大師が頭から全身に紅衣を被り座禅する姿を写した玩具。



天狗も赤いぞ



能や歌舞伎の演目。文殊菩薩に仕える霊獣の獅子が牡丹の花に戯れつつ舞う。白毛の親獅子と赤毛の仔獅子による「連獅子」は明治5年(1872)が初演。

狸狸

猿に似た想像上の動物で、朱紅色の長毛で覆われ酒を好む。能面や歌舞伎の隈取のほか、酒を酌み交わして舞う謡曲「狸々」にもなった。



《狸々》(部分)
跡部北馬 メトロポリタン美術館蔵

鐘馗

中国で疫病神を追い払い魔を除くとされた神。玄宗皇帝の夢に現れて病を治したので、その姿を描かせたという。日本では端午の節句の幟に朱色で描いたり、人形を魔除けとした。



《鐘馗幟》(部分)
松川半山 文久4年(1864) シカゴ美術館蔵

20世紀

赤絵

明治の
三代歌川広重

幕末頃から輸入された人工染料は、明治の浮世絵に多用された。特に毒々しいまでの赤が目立つことから「赤絵」と呼ばれ、文明開化を代表する色となった。



《東京浅草観世音並公園地煉瓦屋新築繁盛新地遠景之図》
宋斎重清 明治19年(1886) 国立国会図書館蔵



19世紀

紅嫌い

勝川春潮 鳥文斎栄之
窪俊満

紅などの華やかな色を押さえ、墨や紫など渋めの色調で整えた錦絵。天明から寛政期(1781-1801)に流行。



《夜景内外の図》窪俊満 天明(1781-89)後期 シカゴ美術館蔵

錦絵

鈴木春信

明和2年(1765)の絵暦交換会をきっかけに、版画技術が発展した結果、フルカラーの多色摺木版画が誕生。鈴木春信が活躍。



《おくめ 瀬川吉次 むめわか 坂東彦三郎》
鳥居清広 宝暦4年(1754)頃 メトロポリタン美術館蔵



《坐鋪八景 めり桶の暮雪》
鈴木春信 明和3年(1766)頃 メトロポリタン美術館蔵



《文読心遊女》
石川豊信 延享2年(1745)頃 シカゴ美術館蔵

紅摺絵

石川豊信 鳥居清信
鳥居清広

初期の多色摺の浮世絵。筆彩色ではなく、紅色、黄色、草色などの2、3色の版で摺られた。

紅絵

奥村政信 石川豊信

墨摺絵に主に「紅」を筆で彩色。紅は、紅花の花弁から作られた絵具で、大量の生花から少量しか取れないため貴重であった。透明感があり発色が良いが光に弱く退色しやすい。

漆絵

奥村政信 奥村利信
西村重長

紅絵の墨の部分に、膠を混ぜた墨を筆で塗り重ねて光沢を出す。紅絵とほぼ同時期に流行。

紅絵

奥村政信 石川豊信

漆絵

奥村政信 奥村利信
西村重長

紅絵

奥村政信 石川豊信

18世紀